東京外国語大学総合文化研究所　総合文化研究　第 25 号（2021）
Tokyo University of Foreign Studies, *Trans-Cultural Studies*, Vol. 25 (2021)

アルベール・サロー『植民地の偉大さと隷従』合評会

新谷和輝

本合評会は 2021 年 6 月 25 日、総合文化研究所の主催および東京外国語大学出版会の共催によって、Zoom 上で開催された。

合評会では、まず本書の訳者である小川了氏による講演が行われた。小川氏は西アフリカやセネガルを中心にした民俗学・歴史を専門とし、著書には『第一次世界大戦と西アフリカ　フランスに命を捧げた黒人部隊「セネガル歩兵」』（刀水書房、2015 年）などがある。

小川氏は、まず、本書のタイトルにある「隷従」という言葉をどのように捉えるべきかを論じた。植民地主義を礼賛するかのように思われる「植民地の偉大さ」という言葉につづく「隷従」という文言は、一見するところ「被植民地者による宗主国への隷従」として読まれうる。しかし小川氏によると、サローがここで言わんとしていることは、彼ら植民者のほうが隷従状態にあるということだ。植民者は、植民地をよりよく統治する義務を課せられ、その責任を全面的に負うことになる。膨れ上がるその責任の重さを指して、サローは「隷従」と言った。それはつまり、「自らの意志に関わらない絶対的拘束」である。

サローの記述を高みから批判せず丁寧に読み解くことで、小川氏はそこに垣間見える当時の植民者の心理を明らかにしていく。第一次世界大戦後の勢力図において、多大な債務を抱えたヨーロッパは劣勢に立たされていた。力を増すソ連やアメリカ合衆国に苛立ちながら、また植民地大国としてのイギリスへの対抗意識を燃やしながら、サローはフランスが取るべき道を探る。彼の理想は、「広大なる地球一家」というユートピア的なものであり、ヨーロッパ（フランス）を人類進化を司る精髄として、世界統一を成し遂げることを夢みた。このような融和的世界を望むサローは、人種間の優劣を批判し、現地人に正当に接さねばならないと考えていた。サローにとって、植民地事業は文明化の遅れた現地人に高度な教育や文化を施す「善き行い」であり、その事業は抑圧的ではなく、なるべく公平に進められねばならない。

植民地事業＝ノブレス・オブリージュとみなすサローには、どうして現地民が抵抗するのかが理解できなかった。本書ではサローの苦悩がところどころに記されているが、小川氏は、善き植民者であろうと真摯に自らの立場を吟味するサローの姿勢を読み取る。そして、そこにこそ、植民地事業が本来的かつ内在的に抱え込んでいる矛盾が表れていると指摘する。植民者の視点に立つことで、彼ら自身が囚われていた植民地主義の本質が明らかになる。このように、本書が植民地事業を肯定的に捉えるのではなく、その限界を指摘するものであることは、原著の翻訳に先立って置かれている訳者による「序にかえて」でも強調されている。

小川氏の講演に引き続いて、3 名のコメンテーターからコメントがあった。フランス文学・文化史を専門とする荒原邦博氏からは、サローと関連づけて、アンドレ・マルローやジョ

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

ルジュ・グロリエらによる文化を通じての植民地主義についての指摘がなされた。植民地を強引に押さえつけるのではなく、利他的で寛大な精神をもって統治すべきとしたサローの信念に並行して、1931 年の植民地博覧会では非西洋文化を尊重することが提起された。グロリエはクメールの伝統文化を復興することを目指したが、この時期からクメールの古美術品の販売が促進され、北米やヨーロッパに現地の美術品が大量に流れることになる。しかし、1923 年にインドシナで文化財盗掘事件をおこしたマルローに古いタイプの植民地主義が見出せるように、こうした美術品の流通の根底にはサローとも共通する植民地主義の矛盾が表れていると荒原氏は述べた。

次に、ベトナム文学を専門とする田中あき氏からは、フランス植民地ベトナムにおけるサローの影響力についてコメントがあった。教育によって現地社会を近代化させようとするサローの狙いはベトナムにもあてはめられ、田中氏が研究するカイ・フンなどもそうした植民地事業と直面することになる。しかし、やはりサローが述べるジレンマがここでも表面化し、フランスによる現地教育には言論統制がつきものだったという。

最後のコメンテーターは、アフリカ地域研究・人類学を専門とする佐久間寛氏である。佐久間氏は、サローの葛藤から、植民地における教育と愛のあり方をコメントし、本合評会全体をまとめる観点を示した。経済主義的植民地化を批判し、人間の道徳的開発の一環として植民地での教育を重視したサローの理想は、「愛と連帯の植民地主義」と呼ぶべきものである。しかし、教育によって育った現地民はその後やがて宗主国に牙をむくことになる。経済的だけではない文化的な独立を彼らが勝ち取ろうとしたとき、植民地政策の矛盾が露わになる。

植民地事業を「善き行い」と信じて疑わなかったサローのうちにあったのは、佐久間氏によれば、植民地への「歪んだ愛情」である。かつての植民地政策を現代の視点から断罪するのでなく、そこにうごめく諸々の思惑や構造を問い直し、それらに絡め取られた人々の「従属」のあり方を見つめることが、いま植民地主義を考えるうえで必要だと感じられた合評会であった。

最後に、本合評会後に小川了氏が逝去されたことをここで報告しなければならない。小川氏のお仕事から私たちが学ぶべきことはまだまだたくさんある。心からご冥福をお祈り申し上げる。

アルベール・サロー『植民地の偉大さと隷従』合評会
日時：2021 年 6 月 25 日（金）18:00 〜 19:30
場所：オンライン

講演：小川了（東京外国語大学名誉教授）
コメント：
荒原邦博（東京外国語大学）
田中あき（東京外国語大学大学院）
佐久間寛（明治大学）

合評会：

アルベール・サロー
『植民地の偉大さと隷従』

日時：2021年6月25日（金曜日）　18:00〜19:30

会場：オンライン（左下のQRコードよりご参加いただけます）

講演：小川了
（東京外国語大学名誉教授）

コメント：
荒原邦博（東京外国語大学）
佐久間寛（明治大学）
田中あき（東京外国語大学大学院）

司会：久野量一
主催：総合文化研究所
共催：東京外国語大学出版会

お問い合わせ先：
tufs.ics[at]gmail.com
※[at]を@にかえて送信してください。